

捨てられたことによって、日本の自然を脅かす存在になっています。飼いきれなくなったからといって、絶対に野外へ放すべきではありません。最後までペットと付き合い続けることが、そのペットにとっても大事なことです。都市河川や公園でよく見かけるミシシippアカミガメ(ミドリガメという名で売られているカメ)も、もともと日本にはいなかった外来種です。今では日本全国に分布し、水草や、魚、鳥、カニ、エビなど食性が広いことから、各地で影響が心配されています。これ以上は広げてはいけません。里山を代表するように日本人は古来より自然とうまく向き合ってきました。これからはずっとうまく向き合っていくには、一人ひとりのモラル、そして、多くの方々のご理解、ご協力がが必要です。是非お互い協力しあって、これからも日本の豊かな自然や文化を次世代にも伝えていくために大切にしていきたいと考えています。

亀記録について

亀崎直樹・谷口真理

On the Kikiroku (Japanese Fresh Water Turtle Database)

By Naoki Kamezaki and Mari Taniguchi

生物多様性の保全の重要性が認知されるようになった昨今、個体群生態学の研究もかなり進み、種ごとの知見もかなり集積されるようになったのは喜ばしいことである。ところが、生物多様性の保全を考えたとき、最も重要で基本情報となるのがその分布と密度である。しかし、種ごとの分布については不明な部分が多く、極めて不十分な知見しかない。確かに、環境省により自然環境保全基礎調査がほぼ5年おきに行われ、それによって作成された日本の動物分布図集(www.biodic.go.jp/kiso/atlas/)に見るように、分布が明らかな種もある。しかし、「種の多様性調査(動物分布調査)対象種一覧(www.biodic.go.jp/kiso/do05/72_ryo.pdf)」では、まだ、情報がない、あるいは不足しているとされ、分布図が作成されていない種も少なくない。

筆者らは、神戸市立須磨海浜水族園の生物多様性保全事業の一環として、西日本の淡水性カメ類の分布について2010年より調査を開始したが、既存の知見の少なさには驚くばかりであった。2011年の段階において、日本には7種(内、ミナミイシガメは2亜種)の淡水性カメ類が分布しているが、前出の生物多様性調査において分布図が描けている種はヤエヤマセマルハコガメ *Cuora flavomarginata evelynae*、リュウキュウヤマガメ *Geoemyda japonica*、ヤエヤマイシガメ *Mauremys mutica kami* の2種と1亜種であり、それ以外の種もしくは亜種、すなわちニホンイシガメ *Mauremys japonica*、クサガメ *Chinemys reevesii*、ミシシippアカミガメ *Trachemys scripta elegans*、ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis*、ミナミイシガメ *Mauremys mutica mutica* については分布図を描くための情報が不足しているとされている。

この中でニホンイシガメは日本固有種でありその保全は重要であろうし、ミシシippアカミガメは外来種であり、生態系やニホンイシガメへの影響が危惧されている。また、クサガメに

においては、最近、18世紀末の江戸時代に移入された外来種であるとする説が提唱され(2010年7月31日産経新聞)、それを支持するのかニホンイシガメとの間に雑種が生じることも確認されている。また、ニホンスッポンについては、在来の個体群と養殖用に移入した大陸あるいは台湾産の個体群が生息しているという指摘もされている(太田・佐藤、1997)。さらにまた、関西地方にその分布が知られているミナミイシガメも、古くに日本に持ち込まれた外来種との指摘がなされている。このように、日本では在来種と外来種のカメが十分な知見がないまま同所的に生息し、遺伝的、生態的な干渉を種間で及ぼし合いながら生活していると予想される。しかし、生活サイクルすなわち寿命の長いカメでは、種組成など生態的な様相の変化が遅く、その変化を追跡することは難しい。その結果、その変化を追跡調査する研究者も少ないと考えられる。

このような状況の中、筆者らはまずある程度信頼のおけるカメ類の生息情報を蓄積する体制を構築することを提案させていただきたい。具体的には、亀記録というデータベースを作成し、それを本誌「亀楽」に掲載し蓄積していく予定である。亀記録には、断片的なカメの発見または捕獲記録を蓄積していく予定である。もちろん、前述した親子調査員のデータも載せていく予定である。

ここで問題になるのは、情報、特に種の同定の正確さである。これには、以下のように対応する予定である。まず、一般からの情報提供に関しては、写真資料が添付されたものを原則として亀記録に掲載する予定である。また、これまでの実績から淡水カメの同定に関してはその力量が十分あるとみなした方からの情報も掲載する予定である。ここでは、その力量の判断基準が求められる。それについては今後検討していく予定であるが、当面は発行人の判断にまかせていただきたい。

また、ここに掲載されたデータを使用するルールは次の通りとしたい。まず、ここにあるデータを個別にそのまま引用する場合は、情報提供者の氏名を出していただきたい。例えば、下記のように記載できる場合は、これを習っていただきたい。

上田利彦. 2003. 亀記録(030323-1), 亀楽 1: 13.

また、複数のデータを使って解析を行うなどする場合は、発行人に連絡をいただきたい。データの使用量などを考慮して、情報提供者を共同研究者として参加していただくなどの処置を考えたい。いずれにせよ、亀記録は採取されても消え去っていく淡水カメの情報を残し、後生に伝えると共に、日本における現況を鳥瞰的に知ろうとするものである。日本の淡水カメを中心とした淡水生態系の保全のために、心ある方々の積極的な参加を期待したい。

引用文献

太田英利・佐藤寛之. 1997. スッポン *Pelodiscus sinensis*(Wiegmann, 1834) p.322-330. 水産庁(編). 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV). 日本水産資源保護協会, 東京.